

今から四十年程前、田園地帯の広がる北関東でのことだった。「H」さん宅の葬式に行ってくれないか」若手社員の私は、職場の課長から声をかけられた。会社を代表して葬儀に参列しろという命令だ。会社と個人からの香典を預り、場所・時間・名前を聞いて、「ああこの辺りの集落だな」と見当はついていた。喪服に着替え社用車でその集落に行くと、「H」家葬式の看板はすぐに分かった。家の前に車を止めると、「櫻井さんよく来てくれた」と声が。顔見知りのパートさんが出迎えてくれた。「あ、この方も一族なのだ」とお悔やみを言って、隣組の方が大勢待機する受付に行き、十件ほどの香典を渡した。それからだ・・

「何か違うな」という空気を感じた。

祭壇の前で焼香をしてふと写真を見ると、

どうみてもおじいさんの遺影だ。聞いていたのは「お父さん葬式」のはずだった。通された座敷に座り運ばれたお茶を飲みながら、「どうも葬式を間違えたようだ」と悟るのに時間はかからなかったが、困った。冷汗が流れ、時間が一瞬止まった気がした。「何とかしなければ」、預かった香典は会社や個人の志だ、当人に渡さないわけにはいかない。仕方がない、覚悟を決めて謝るしかない。

座敷を辞した私は、パートのHさんを見つけた。つけ事の次第を話した。「ああそのHさんの葬式ならここから少し先の家だよ、同じ名前が多いからね、この辺りは」と許してくれた。受付の隣組の方は香典を返しつつ、墨書の台帳に一件ずつ縦に線を入れ消し込んでいく。台帳のほぼ一頁が真っ黒に消し込まれてしまった。受付の方の何とも言い

難しい顔は、今でも脳裏から離れない。

「あとから出直しますから」と言い残した私は、あわてて本来行くべき社員の「さ」ん宅へ急行した。しかし時既に遅く、葬列は家を出発し墓地に向かっていた。香典は渡したが、この葬式もまた取り返しがつかない事態になっていたのだった。